

---

# 感染者の創造

岡田健四郎 原案：岡田健八郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

感染者の創造

### 【Nコード】

N6792X

### 【作者名】

岡田健四郎 原案：岡田健八郎

### 【あらすじ】

ある事件が起きる十数年前、世界中を放浪し、フィリピンに流れ着いた黒木は古美術収集家の男と知り合い、考古学発掘隊に加わることになった。発掘現場で、ウイルス学者の野村や山岸、そしてフィリピン人の少女のアイビと出会い、親交を深めた。だが、その頃から、黒木の周囲で奇妙な連続猟奇殺人事件が発生し始めた。一方アイビは、自身の体が変わり始めたと実感し始めた。

## 百獣の王の死

ある事件より12年前

風がすすり泣くように音を立てながら、海を渡っていた。

ライオンは走っていた。追手よりも速く。ライオンは追手よりはるかに強く、敏捷で、凶暴である。単独で狩りをして、自分より体格の大きい獲物を倒したこともあった。

追手は走っていた。ライオンよりも遅い。追手は獲物よりはるかに弱く、小さく、簡単に死ぬ。だが、ライオンよりも狂暴だった。

ライオンはこれまで、多くの獲物を殺したことがある。自分の縄張りを荒らした動物を八つ裂きにしたこともある。

だが、今回は違う。

ライオンの堂々とした狩り、外見は百獣の王にふさわしかっただろう。

だが、今回は違う。

野生の雌ライオンは、野性的本能で生命の危機を感じていた。

自分を追う者は、自分よりもはるかに弱い。

だが、今回は違う。

その鋭い爪は獲物の体を引き裂くことが出来る。その鋭い牙は獲物の体を噛み砕くことが出来る。その鋭い嗅覚は獲物を逃すことはない。

だが、今回は違う。

今回は追手が狩人であり、自分が獲物だ。

本来なら、敵を自分の生まれつきの武器で殺すことが出来る。

だが、今回は違う。

自分の野生で鍛えられた本能と危機管理能力が、敵と戦ってはならないと語っている。

ただ、今回はひたすら逃げろ、体が脳にそう訴えかけた。  
脳は逃げることを選択した。

ライオンは走り続けた。追手が追跡を中断するのを待った。  
だが、追手は追跡し続けた。

ライオンはこれほど恐怖と屈辱を感じたことがない。

強者が弱者に逃げるなどと――

ライオンは立ち止まった。

目の前は、深い崖が広がっていた。

引き返そうと振り向いた瞬間、追手はすぐ近くに居た。

追手はうなり声を発した。

ライオンは、死を覚悟した。

追手は人間だった。

そしてライオンは見た。

人間の目は赤かった――

## 依頼（前書き）

### 【主要登場人物】

黒木大輝くろき たいき

天才生物学者。1人旅を趣味とする。異性に興味がない。美術と独身生活を愛する孤独な男。

野村たけしのむら

ウイルス学者。新種ウイルスを発見し、歴史に名を残すことを夢見ている。

フェルディナンド・アイビ

フィリピン人少女。元気のある優しい美人のため、学校ではアイドル的存在。

山岸薫子やまぎし かおるこ

野村の助手。自分の問題は自分で解決するべきと考えており、誰にも心が開けない。

山岸百合やまぎし ゆめ

薫子の妹。姉とは反対で誰にでも心が開ける。

カルロ・アリギエーリ

イタリア古美術収集家。黒木と面識がある。

ジョン・ハドソン

傭兵部隊総隊長。老人だが、強靱な肉体を持つベトナム戦争経験者。ベトナム戦争での影響か、アジア人を恐れている。

ロシュ

武装傭兵部隊隊長。戦争経験者だが、どの戦争経験者かは言わない。

シャルトラン

武装傭兵部隊少尉。

マクシミリア神父

フィリピン教会の神父。ヨーロッパ人。元エクソシスト。

## 依頼

彼ははつと周りを見渡した。そこは殺風景の平地だった。地面には、大勢の兵士の死体が転がっていた。兵士と言っても、明らかに古代の兵士だ。彼は兵士の鎧と盾を見た。ローマ兵だった。

黒木大輝は、はつと目を覚ました。頭がぼんやりしたまま、ベッドから降りた。

「…夢か…」

大輝は頭を働かせようと頬を叩いた。電話が鳴っていた。

「えっと…もしもし？」

「クロキタイキトオハナシガシタイ」片言の日本語だ。訛りからしてイタリア人かな？

「イタリア語で大丈夫です」とりあえず日本語で言ってみた。

すると、向こうはイタリア語で何かを言った。大輝は頭の中で訳した。こいつは確か、黒木大輝に用があると言ったな。

「私がそうです」イタリア語で答えた。

「やあ大輝君。君に話がある」やけに馴れ馴れしい人だな。

「失礼ですが、どなたですか？」

「おっと、名前は名乗らないとな。私はカルロ・アリギーリ」  
カルロ？どつかで聞いた名だな…

「君に助けられた男だ」

そう言えば、この前バスの中で突然倒れた老人が居たな。俺がすぐに緊急措置を取ったおかげで一命は取り留めたけどな…

「えっと、何の用ですか？礼なら要りませんから」

「実は私は来週フィリピンに行くことにした」

「それはそれは、おめでたい」

「そこで是非にと君に同行してもらいたい」

耳を疑った。「同行？失礼ですが、話がまったく掴めません」

「君は優秀な生物学者だと、君の同僚が言っていたぞ」

「確かに生物学は得意分野ですが、あくまで生物学であって、医療技術ではありません」

「同じことだ」

「いいえ、まったく違います」

しばらく沈黙が続いた。

「では、もしフィリピンで古代遺跡が見つかったと言ったら、君はどうする？」

黒木の血が騒いだ。古代遺跡だって？

「本当ですか？」興奮を押さえた声で聞いた。

「ああ。つい最近、フィリピンに滞在中の私の執事が、フィリピンで遺跡を発見したと」

「それで？」

「私は古美術などに興味があつてな。話によると君は美術や遺跡などを愛する男だと聞く」

黒木は完全に負けた。「あなたの勝ちだ。同行させてください」

その返事に向こうは満足した。

「来週だ。家用機でフィリピンに行く。集合場所は、ジュネーヴ」

「ニューヨーク州のジュネーヴですか？」

「スイスのジュネーヴだ」

「なら、そちらに行くのにかなり時間が掛かりますね」

「なぜ？」

「日本とヨーロッパは遠いんですよ？」

「君はイタリアに滞在中だと聞いたが」

そうだった。あの悪夢のせいで自分は日本にいてと思っていた。

「では、来週ジュネーヴに行けばいいんですね？」

「詳しい場所はファックスで送る」

「では」

「いい夜を」

電話が切れた。

黒木は眠れないときの特效薬——湯気が立つココアを味を楽しむようにゆっくりと口に注いだ。

彼の両親は大富豪であったため、世界各地に別荘を建てている。イタリアも例外ではない。

彼の部屋は生物学の博物館のようだと、両親にからかわれた記憶がある。動物図鑑、人体模型、小型動植物の標本、ウイルスレポートなどが、部屋に飾ってある。

黒木は木製の椅子に腰をかけ、ココアのぬくもりを味わった。

彼は昔から図抜けた美男子とまでは行かないが、同級生や同僚が、理知的と評する魅力があった。

豊かな黒い髪、好奇心に満ちた鋭い瞳、人の心をつかむ、深い声、運動選手並みの肉体、大人びた顔。同じ研究所に勤める女性研究員たちからは、かなりの人気と人望があった。

学生の頃は謎の少年扱いされ、好奇心の目を向けられた。知識が豊富で勉強ができ、なおかつ運動神経も良かったことから、バレンタインデーには山のようなチョコを貰った。どの教科の発表でも手を抜かず、コンピューター・グラフィックなどで分かりやすく説明するため、いつも発表の時は生徒からも教師からも期待されたものだ。

黒木は鏡で自分を見つめた。昔から何も変わっていないな。唯一変わったことは、面白みが減ったことだ……

幼少の頃から、あらゆるものに興味が出たら、図書館やインターネットでよく調べたものだ。独自の調査書を作ったこともある。生物学と美術と宗教は特に興味があった。生物学者になったのも、興味があったからだ。何百種類もの細菌やウイルスを調べるのは楽しかったな。

だが、年をとるごとに、段々と面白みが減った。今ではウイルスと美術以外には何も興味がない。

昔は良かった。昔は世界は未知のパンドラボックスだったな……

よく同僚達に言われたものだ。

「お前に＜愛＞はないのか？」

そのたびに決まって答える。

「俺は3つのものを愛してる」

黒木が人生で愛の対象になっているもの——生物学、美術、独身生活。

最後の独身生活は、黒木にとって自由そのものだった。何にも縛られることなく、世界を旅したり、好きなだけ眠ったり、好きなだけ食べたり、好きなだけ勉強したり、好きなだけ遊べたりする。

独身生活はいい。まさに神が、俺に与えてくれた最愛の生活だ。

1匹のシュパード犬が舌を出しながら黒木の所にやって来た。

おっと、もう2つ愛するものがあつたな。愛犬のサム、そして、エヴァンゲリオン。

ファックスが受信した。紙がゆっくりと出てきた。

「完璧な予定だ。来週から忙しくなるぞ」

ファックスには地図が載っていた。

## フィリピンへ

黒木大輝は物音を聞いた。

窓ガラスをとんとんとんと、何かが叩いていた。

はっと顔を上げ、腰を浮かせ——手元の書物が滑り落ちた。

それから——何だ、雨か。

大輝はほっとする。誰かが叩いていたら、それはそれで恐ろしいな。ここは2階だ。書物に戻る前に、電気スタンドに手を伸ばして、灯りをつけた。

スタンドの光が大輝の顔を照らした。大輝は縁なし眼鏡を掛け、書物を読み始めた。

まったく、それは素晴らしい書物だった。時間の経過が、まるで分からなかったのも不思議ではないくらいだ。『クトウルフ神話』。ハワード・フィリップス・ラヴクラフトの描いた小説世界をもとに、ラヴクラフトの友人である作家オーガスト・ダーレス等の間で、架空の神々や地名や書物等の固有の名称の貸し借りによって作り上げられた、架空の神話体系のこと。

心理学者の友人が言ったことある。人は生命の危機にあうような恐怖は感じたくないが、絶対安全な恐怖にはあいたがるものだ。まったくその通りだ！俺もその中の1人だ！。絶対安全な恐怖を味わうため、俺は店の棚から宇宙的恐怖、すなわち『クトウルフ神話』に手を伸ばした。ラヴクラフトは天才だよ！あの発想はどこから来ることやら。

大輝は『クトウルフ神話』を本棚に戻すと、今度はヴィクトル・W・フォン・ハーゲン著『インカ帝国』に手を伸ばし、お気に入りページを開いた。そして読んだ。

この踊りに合わせて打ち鳴らされる打楽器演奏には、ふつつ、敵の戦士の死体で作った太鼓が用いられる。皮膚が剥がされ、腹部が

太鼓の役をするようにぴんと張られると、身体全体が一種のサウンド・ボックスの働きをして律動する音は、その開いた口から流れ出るというわけである。グロテスクではあるが、きわめて効果的である。

大輝は微笑して読み直した。グロテスクだが、効果的、か……まったくだ！ 確かに、そうだったに違いない！人間の皮を、それも恐らく生きたまま剥ぎ取って、太鼓にするなど、古代人の発想力は恐れ入る。そもそもこんな考えを出すなんて、どんな心理だろうか？大輝は煙草を一服吸った。煙草を吸うと、体がのびのびした。これもニコチンの力か？あるいは、それ以外か……

鹿の頭の剥製が、大輝を覗いていた。

「何だ？何か質問あるか？」

大輝は煙草を銜えたまま、鹿の頭をまじまじと見ていた。この剥製ともお別れだ。彼は吐息をつくと本を閉じた。母さんはあの剥製が嫌いだったが、どこが嫌なのだろう？遅しく、力強いじゃないか？荷物がまとまった大型のスーツケースを持つと、愛犬のサムを呼んだ。サムは尻尾を振りながら、やって来た。

大輝は待ち合わせ場所に向かった。そこは、自家用ジェット機があつた滑走路だ。

「やあ、黒木君」ミスター・ブラック・ツリーイタリア語が聞こえた。

カルロ・アリギエーリがやって来た。白髪染まりのオールバックの髪形をし、顎を引き締め、黒いコートを着ていた。

ブラックツリーそれにしても、黒木だとは、何とも、まあ、素晴らしいセンスだ。

「こんにちは」イタリア語で返した。

「久しぶりだな。準備は？」

「来ています」

自家用機の扉が開いた。

「さあ乗って。素晴らしい旅行の始まりだ」

素晴らしい旅行……古代遺跡が見れるのはいいが、場所がフィリピ

ンなのは不満であつた。

自家用機の中は、一般航空機とたいそう変わらないが、少し狭かつた。だが、椅子の心地よさはこちらが上だ。大輝は右側の一番前に座つた。その隣にカルロが座つた。

「他に誰がいらっしゃいますか？」大輝は尋ねた。

「大勢だ。考古学発掘隊は先にフィリピンに居る」

「そんなに発掘隊が居るのですか？」

「実を言うと、大半は傭兵が占めている」

大輝は軽くうなずいたが、心底驚いていた。彼の傭兵のイメージは、屈強な体つきをしている野蛮な連中だ。

「傭兵を雇つたんですか？」

「アジアは信用できないからな」

確かにそうだ。フィリピンでビートルズが暴行を受けたことがあつた。原因は、その時の首相がフィリピンでライブをしていたビートルズにパーティーの招待をしたが、これを断られたため、首相夫人が怒つてマスコミに「勝手にすっぱかされた」などと嘘をついたそうだったな。

「どんな傭兵がいらっしゃいますか？」

「ベテランばかりだ。忠誠心は無いがな」

スイス衛兵隊を雇いたいもんだ。バチカンの衛兵で、忠誠心は世界一だ。素晴らしい衛兵だ。

「スイス衛兵隊を雇つてみたいですね」

「なぜだ？」

「傭兵は金さえ払えば働いてくれる肉体派の連中ですからね」

カルロは満足げにうなずいた。「確かに。君とは完全に理解し合えると思うよ、ミスター・ブラックツリー」

大輝はそう思えなかつた。理解しあいたいなら、まずはブラックツリーはやめろ。

## 考古学発掘隊

大輝は飛行機の中で寝てしまったのか、気づけば既にフィリピンについていた。

「いい夢は見たかな？」

カルロが笑みを見せながら言った。

「すいません、どうも昔から俺は飛行機に乗ると寝てしまう体質なんです」

適当に言い訳を考え、言った。

「これからは？」

「車で現場まで向かう」

外にはワゴン車が待機していた。

大輝は、首を鳴らしながら、飛行機を降りた。

ワゴン車の後部座席に乗り、出発するのを待った。

カルロが助手席に乗り、運転手がワゴン車を出発させた。大輝は

退屈しのぎのために、夏目漱石の坊ちゃんを取り出し、読み始めた。

「車内の読書は目を悪くしますよ」

「安心してください。既に悪いです」

そう言えばとばかりに、大輝は聞いた。

「俺の愛犬は？」

「後で届きます」

それを聞いて安心した。犬は人よりも忠実で、飼い主を裏切らない。俺が世界で唯一、信頼できる人物だ。いや、犬物が……

「到着までは？」

「もうすぐですよ」

そこは人気の無い、町外れの乾燥地だった。

だが今は、多くのテントがある。

よく見ると、武装した人物達が居る。

「あれは？」

「雇った傭兵だ。みなベテランばかりだ」

大輝にとつて、兵士はベテランかベテランじゃないの問題ではなく、忠実か忠実じゃないかの問題だった。忠実じゃない兵士はいつ裏切っても、おかしくないからな。

車が止まり、カロルは下りた。大輝も慌てて降り、カロルの後ろについてきた。

1人の男が来た。男はオールバックの白髪で、青い目をし、しわだらけの顔をしている。

だが、1970年の起きたベトナム戦争でのアメリカ軍のような、熱帯野生服を着ている。

M1956型個人装備を着け、手榴弾2個をぶら下げ、やって来た。

明らかに老人であつたが、年齢を感じさせない屈強な体つきをしていた。つまり、マツチョだ。

「やあジョン。こちらは日本人のクロキタイキだ」英語でカルロが説明した。

「どうも、武装傭兵部隊総隊長のジョン・ハドソンです」

「どうも、黒木大輝です」

大輝は左手を差し出した。ジョンは一瞬ためらつたが、快く握手した。

ジョンは2人を案内した。

「黒木君、ここでは英語でしゃべれよ」

カルロは黒木に小声で忠告した。

テント内に入ると、2人の男が種類を纏めていた。

「こちらは、考古学発掘隊護衛部隊隊長のロシュです」

ロシュがお辞儀した。ロシュは背が高く、剛直で意思が固そう顔だ。黒っぽい髪を軍隊風に短く刈り上げ、その青い眼差しは、まるで歴戦戦士のように鋭く、強靱な意志が宿っていた。

黒いアルマーニのスーツを着て、右耳に用心深くイヤホンを隠したその姿は、傭兵とは程遠いシークレットサービスのようだ。

「こちらはシャルトラン。武装傭兵部隊少尉だ」

シャルトランは、アメリカ陸軍新装備IIFSに似た装備をしていた。

顔は細長く血色が悪い。並外れた痩身で、無装飾のアメリカ軍制式採用銃のコルトM16A2を右手に抱えながら近づいてきた。

「テントの裏で、部隊が準備しています。遺跡の入り口はテントの裏です」

シャルトランは恐ろしいくらい低い声で言った。

テントの裏に案内された。

裏では、5人の男が迷彩服や野生服などを着て、旧ソ連のよって開発されたテロリストの銃AK47やその進化型ANアバカンなどを装備して、待機していた。

よく見ると、2人は傭兵らしくない人物が居た。

「あの人たちは？」

大輝はカルロに聞いた。

「今回の医療係を担当する野村たけしと助手の山岸薫子だ」

野村は白衣を着ていた。眼鏡を掛け、無造作なぼさぼさな髪型だ。助手の山岸薫子は、袖なしの白いシャツとチノクロスのショートパンツという格好で腕を組んでいた。体つきはしなやかで背が高く、長い黒髪、図抜けた美人とは言わないが、大輝は動物的な強さを彼女から感じられた。遠目では分からなかったが、以外に巨乳だ。

大輝の前では、巨大な崖が聳え立っていた。

入り口と思われる場所には、正四角形の穴が開いていた。穴の周りには、細長い木の板が打ち付けられてた。

大輝は感心した。これぞ地獄の入り口だ。崖が崩れたら、俺は死ぬな。

「いつ中に？」

大輝はカルロに尋ねた。

「先に調査隊を送ったが、数分前に通信が途絶えた」  
代わりにジヨンが答えた。

「原因は？」

「いまだ不明。電波の届かない位置に居るだけだと思いが、万が一の事態も考えられる」

大輝はぞっとした。昔の古代人の仕掛けた罠に引っかけたのか？カルロはジョンに聞いた。

「調査隊の装備は？」

「UZIや Ingram MAC11 などといったって軽装備です」

どこがだ和大輝は思った。UZIとMAC11はよく映画で無法者が撃ちまくる銃じゃないか

「早速中に入ろう」

「分かりました。ロシュ！」

ロシュが慌てて駆け寄ってきた。

「何でしょうか！？」

「お前が護衛部隊を指揮するんだ。分かったな？」

「了解しました！」

ロシュは敬礼した。

ロシュを始めとして、シャルトランと5人の傭兵が中に入り、カルロが大輝と野村とその助手の薫子連れて、後に続いた。

中は思ったより暗く、通路は狭かった。

「私は野村です。こちらは山岸」

野村は右手を差し出してきた。

「俺は黒木大輝」

大輝は握手した。

「良かったですよ。同じ日本人が居て」

「まったくですな」

本当はそう思っていない。なぜなら相手は得体の知れない男と女だ。

## 存在しない花

大輝は湧き出る興奮感を抑えていた。  
もうすぐだ…… もうすぐで！

長かった狭い道の出口が見えた。  
魂が奪われる眺めだった。

眼下に石造りの、美しい街並みが広がっていた。  
正確に切り出された石材は精緻に組み上げられ、それを手掛けた者たちの途轍もない建築技術の高さを示していた。  
どこからか射し込む太陽の自然光が、地底の都を照らしていた。  
長く続いた洞窟の奥にあったのは、入り口からは想像できぬ大空洞と、そこを埋め尽くす神秘の建築物群だ。

古びた、古代の都市の遺跡――

「素晴らしい……」

カルロは呟いた。

他の人物達も感動と驚愕で言葉が出なかった。

そうだとも。古代人の技術は今よりも素晴らしいものだよ。

目の前に、石造りの大きな橋が立っていた。

橋の奥に、太陽光が集中していた。

大輝は橋を渡る。

他の人物達は今だ眼下の都を見ていた。

大輝は抑えきれない興奮を胸に、橋の奥に行った。

そこには、空洞があった。

大輝は空洞に入った。

空洞内の中心に、花壇があった。

花壇には、咲き乱れる青いチューリップがあった。

「美しい」

カルロがいつの間にか後ろに居た。

「ありえない……」

「何がだ？」

「青いチューリップは自然界では存在しない花だ」

カルロは驚いた。

同時に興奮した。

「なら、今宵、また一種類増えるな」

大輝は用心深くチューリップを見つめた。

そして、空洞の片側にまた入り口があることに気づいた。

なんの迷い無く大輝は入り口に向かった。

入り口の奥は、真っ直ぐな洞窟になっていた。

地面に何か転がっていることに気づいた。

空薬莢が無数に転がっていた。

さらに自動拳銃コルト・ガバメントも落ちていた。

大輝は拳銃を拾い上げ、奥を進んだ。

洞窟は長かった。

ようやく出口が見えた。

そこは、まるで墓地のように無数の石造りの棺桶があった。

「ここは墓場か？」

誰かが背中を叩いた。

「うおっ！驚いた、君か」

薫子だった。

薫子は無表情で大輝を見ていた。

「単独行動は危険だよ」

「すまない、好奇心溢れる正確でね」

「すまないとかの問題ではない、お前の単独行動のせいでチーム全

員が危険にさらされる可能性がある」

俺の心配じゃないのね…… 厳しいお方。

その時、薫子の背後に居る人物に気づいた。

「いいか、今後は——」

「危ない——」

大輝は薫子を押した。

後ろから何かが飛びついた。

大輝は頭を下げて避けた。

それは壁に当たった。

大輝はそれを見た。

少年だった。

四足歩行で歩き回る少年だ。

歯は全て鯨のように鋭い牙が生えていた。目の強膜は黒く、虹彩は赤く染まっていた。

大輝は拳銃を構えた。

「動くな！撃つぞ！」

だが、少年は壁を這った。ありえない！

壁を這った少年は穴に入り、姿を消した。

「あれは何！？」

薫子は怒鳴り声で聞いた。

「知るか！俺が聞きたい！」

その時、上から何かが降りてきた。

青年だった。

少年と同じ容姿をした男が上から降りてきた。

「お前、動くな！撃つぞ！」

だが、男は人間とは思えない奇声を発して走ってきた。

「来るな！」

男は静止しなかった。

「許せ！」

大輝は拳銃を一発撃った。弾丸は男の右肩に炸裂した。

だが、男は怯みながらも走ってきた。

「嘘だろ！？コカインでもやってるのか？！」

男は口を開けて近寄ってきた。

大輝は危機感を覚え、拳銃を撃った。

弾丸は頭に炸裂した。

血と肉片を撒き散らしながら、男は倒れた。

大輝は男の近寄った。

「即死、だよな？」

信じられない。

こいつはラリってるのか？  
臭いな。

風呂は行ってないのか？

## 巨漢

今夜は嵐か。

黒木は窓の外に目をやった。

外は暗かった。

遺跡の近くに宿舎があったのは幸いだった。

フィリピンだと思って馬鹿にしていたが、この宿舎は近代的だ。

店主の愛想も良い。

テレビからニュースが流れていた。フィリピン語——タガログ語を知ってるのはこれまた幸いだ。

『——付近では猟奇殺人が続いています。被害者は首筋を食いちぎられて死亡するケースが多く——』

猟奇殺人だと？用心しないとな。

黒木は目を奪われた。

宿舎のオフィスの向こうは磨りガラスになっている。その向こうは廊下だ。

廊下に影が見える。

黒木はベッドの下に隠してあった小さな箱を取り出した。

鍵を開け、箱を開けた。

拳銃を取り出した。銃把にマガジンをセットすると、腰に収めて注意深くドアに近寄る。

ドアの隣に非常用懐中電灯が置いてあるのは幸いだった。

傾注電灯を取ると、ドアを開けた。

そこに居たのは——山岸薫子と言う女性だ。

「やあ君か、何のようだ？」

山岸は不機嫌そうな顔をしていた。

「実は地下室で不振な物音がして」

「ほう？それで？」

「あなたに地下室に来てもらいたいの」

黒木は一瞬嫌がった顔をしたがすぐに元に戻した。

「俺に？頼もしい傭兵が居るだろうが」

「傭兵達は皆どこかに行ったよ」

「ならカロルに頼め」

「老人は大切に」

「店主は？」

「お出かけ中」

黒木はため息ついた。

「よし分かった、見てやるぞ」

そう言って山岸に案内してもらった。

地下室への入り口は金属製の扉で塞がっていた。

これまた幸い、扉の鍵は解除されている。

扉を開けると、地球の裏側まで繋がっていると思うくらい長い階段が下に続いている。

「よし、一緒に行くぞ」

山岸が黒木に向いた。

「一緒に？1人で見に行けないの？」

「俺は暗闇恐怖症って言ってな、暗闇に居るとパニックを起こす」  
「本当に？」

「それに長い時間暗闇に居ると体中の細胞が突然変異を起こして暗闇に適合した体に進化してしまう。俺はそんなのめんだね」

山岸はため息ついた。

「何だかんだ言って、本当は1人になるのが怖いんだろ」

凶星だった。突然変異説は言わなければ良かった。

ここは正直に気持ちを言おう。

「うん、1人じゃ怖い」

「本当にタマついているのか？」

「弾？ああ、装填してるよ」

山岸は何言ってるんだという顔をして懐中電灯を照らして階段を下りた。

黒木は慌ててついていった。  
階段は驚くほど長かった。

黒木は気が散るくらい退屈だった。  
だが終わった。

終点に到着した。

階段を下りきると、今度は下水道の様なトンネルが続いている。  
山岸は進んでいく。黒木もついていく。

まったくこの女性には心底感心させられる。

男勝りの女だな。嫁にしたら夫婦喧嘩に勝てないだろうな。  
そう思いながら歩いていると、壁側にドアが見えた。

黒木はドアに近寄る。

ドアノブは錆付いて開かない。

仕方なくドアを蹴り開けた。

中の光景は素晴らしく忌々しいものだった

壁に繋がった鎖が所々あった。

鎖の先には手枷足枷のような感じのものが付いていた。

何より不気味なのは、手術用の台のようなものに、布を被された  
何かがあった。

黒木は布を恐る恐るどかせる。

思わず叫びそうになった。

死体だった。

若いフィリピン人の女性の死体に乗っていた。

後ろから気配を感じた。

「ミス山岸、ここは危ない」

後ろを振り向く。

だが、そこに居たのは山岸ではなかった。

豚の顔を被った何者かが立っていた。

と気づいたときには意識が薄れた。

まずい——そう思った瞬間が最後の記憶だった。

金属が擦れる音がして、黒木は目覚めた。

そこは相変わらずあの部屋だった。

唯一違うのは、手が後ろに捻られ、手錠が掛けられている。いや、手錠ではなく縄だった。

誰かが刃物と刃物で擦っている。

誰かはすぐに分かった。

店主だった。

太った眼鏡を掛けたフィリピン人店主が包丁を擦っている。

「お目覚めか？」

店主が気づいた。

「お前……何をしている？」

「見ての通り解体作業の準備さ」

「何を解体する気だ？」

「無論お前だ」

この答えで分かった。

こいつはきちがいだ。

「お前は何者だ」

「どうせ死ぬんだ、教えてやる。俺はレイプ常習犯だ」

自称か？

「エッチした女はすぐに殺す」

「じゃあ、最近の猟奇殺人もお前か？」

「違うな、だがあれは面白い」

店主はテレビをつける。

そこにはベッドに縛られている若い女性が映っていた。

突然店主が現れた。

「へへへ、いいことしてやんよ」

テレビの店主はズボンを脱いだ。

そして、無抵抗の女を痛めつけ、そして――

女性のわめき声が聞こえる。

「いつみても勃起しちまうな」

この瞬間、黒木の頭がプツリと切れた。

あの変態野郎は許せない！

黒木はそう思った。

「さて、女の方もそろそろだろ」

女？山岸か！

「彼女をどうした！？」

「この地下に彷徨う野郎に襲われてるだろ。生きてるんなら、俺がエッチするさ」

男は近寄る。

「神に祈ったか？」

「ああ、祈ったよ」

黒木はそう答えた。

店主は笑った。

「覚悟は出来たな？まずは男の大事な所を壊してやるよ」

「お前のを壊してやる！！」

足にも縄を縛ってないのは店主の最大の失敗だった。

黒木は自由な右足で店主の股間を思いつきり蹴る。

店主は悲鳴を上げた。

そして股間を押さえる。

黒木は立ち上がり、右足で店主の顔面を蹴る。

店主は倒れこむ。

黒木は何度も何度も店主の腹や顔の蹴りを入れた。

店主は全身打撲だらけだ。

黒木は包丁を拾い、縄を切って腕を自由にさせる。

そして店主の左足に足枷を嵌める。

「そこで大人しくしろ」

黒木は山岸の所に向かおうとした。

だが、部屋の隅に何かが置いてあった。

水平2連狩猟用散弾銃だ。エレファントガンとも呼ばれている。よく映画やアニメで出てくる銃口が2つの散弾銃だ。

黒木はありがたく散弾銃を拾い、部屋を出た。

川岸は懐中電灯を照らしながら歩いていった。

黒木って男、容姿はいいけど根性はない。

1人で地下室にいけないなんていい例だ。

その時、何かが引きずられる音がした。

「聞こえた？黒木？」

後ろを振り向く。

黒木の姿が無い。

逃げてったの？

とことん根性ない男。

だが暗闇の中から何かが現れた。

それは驚愕だった。

それは一般男性の平均身長を越えた身長を持つ巨漢だった。

大鉈を引きずりながらそれは近寄ってくる。

全身にローマ帝国を思わせる鎧をつけていた。

頭には顔を隠せる兜がある。

大鉈は血塗れだ。

川岸は本能的に逃げた。

逃げる逃げる逃げる

本能がそう命ずる。

だが最悪なことに行き止まりに当たる。

振り返れば巨漢は追ってきている。

もう終わりだ。

そう感じたのか、全身から力が抜ける。

巨漢は気づけば目の前だ。

「……覚悟は出来たよ……」

そう吐き捨てる。

巨漢は大鉈を振り上げる。

横を見ればドアがあった。

だがドアノブは無い。

本当に終わった。

川岸は目を閉じる。

だが、金属が擦れる音がした。

川岸は目を開ける。

巨漢が横を見た瞬間、その顔を何かで殴られた。  
黒木だった。

黒木が散弾銃で巨漢の顔を殴った。

巨漢が怯む。

黒木は巨漢の腹部を何度も銃で殴る。

巨漢は倒れこむ。

「大丈夫か！」

黒木が駆け寄ってくれた。

このときの黒木は頼もしい男に見えた。

巨漢が立ち上がる。

「後ろ！」

川岸は叫ぶ。

黒木はとつさに振り返り、散弾銃を2発撃った。

1発目は巨漢の腹部、2発目は右肩に炸裂した。

巨漢が近寄ってくる。

黒木は散弾銃をブーメランのように投げた。

散弾銃は巨漢の顔に当たった。

だが近寄ってくる。

黒木は天井を見た。

細いパイプのようなものがあつた。

黒木はジャンプし、両手でパイプを掴む。

巨漢が目の前だ。

黒木は両足で巨漢の顔を思いつき蹴る。

渾身の一撃だ。

巨漢は倒れこむ。

黒木は腰に納めている拳銃を取ると、巨漢に乱射した。  
弾丸は巨漢の体のあちこちに命中した。

巨漢は大鉈を捨てて、どこかへ逃げる。

黒木は川岸に近寄る。

「大丈夫か？」

「え、ええ……」

「立てるか？」

川岸は立ち上がる。

黒木はそれに満足し、川岸の手を引いて出口に向かった。  
頼もしい……川岸はそうはつきり感じた。

これまでであったどの男よりも頼もしい。

さつきとはまるで別人だ。

川岸はただついていった。

前とは立場が逆転した。

この男——黒木は川岸つれ、ただ出口を目指す。

“ 実 は ”

宿舎の前に沢山のパトカーと報道陣が居た。

武装した特殊部隊が宿舎内に突入した。

黒木はやって来た救急車の開いた後部座席に座り込んでいた。

「まったく、通報すればフィリピン特殊部隊まで来るなんてな」

「まったくね」

薫子がコーヒーが入った紙コップを渡した。

「俺はココア派だが、ありがた」

コーヒーを口にそそる。

苦いが暖かい。

薫子は黒木の隣に座った。

「今日は、その、ありがとう」

「何が？」

「私を助けてくれたこと」

「素直に礼を言う人間だったっけ？」

「まあ、死に掛けて助けてもらえば礼を言うのはあたりまえでしょう？」

黒木は頷き、再びコーヒーを飲む。

宿舎の扉からあの変態店主が特殊部隊に連行されて来た。

いい様だと黒木は思う。

証拠のビデオも特殊部隊が持っていた。

ますますいい様だ。

だがあの巨漢は連れてこられていない。

私服警官が近寄ってきた。

「あなたの言っていた巨漢ですが……」

「居ましたか？」

「いいえ、でも巨大な鉄の扉を発見しました。あまりにでかく分厚いので焼ききって入るのは不可能だと断念されました」

「そうですか」

薫子は感心したように頷く。

「フィリピン語も分かるのか？ほ」

「俺はこう見えても素晴らしい秀才だ」

天才とはあえて言わない。まだ偉大な発見も研究もしていない。  
する気も無い。

天才と狂人は紙一重と言うしな。

黒木は立ち上がる。

なぜかって？

カロールとジョンがやって来たからだ。

「だいじょうぶか、2人とも！」

カロールが真っ先に聞いた。

「ええ、まあ、無事ですな」

ジョンはその返答に満足した。

「なぜあなた達は居なかったんだ？」

「実は遺跡で仲間の死体が発見された。どれも食われて死んでいる」  
とジョンが答える。

「何に？」

「歯形からして“人”だ」

聞き間違えたことを願った。

「何に食われたって？」

「“人”だ」

食人族でも居るのか、フィリピンは。

黒木はそう思いながら言った。

「詳しく死因を知りたいから、死体は回収してください」

「すでに済ましている」

「死体は？」

「この付近にある研究所にある」

黒木は研究所に来た。

よほど予算が掛かっているのか、立派な研究所だ。中も清潔的だ。

野村が待っていた。

「待ってましたよ、黒木博士」

「ここはなんて言う研究所だ？」

「確かかつてはヴェルネ社と呼ばれる会社が保有してましたが」

「で、死体は？」

「ま、来てください」

黒木は案内された。

警察の死体解剖室だっけ？それに似ていた。

そこに裸の死体が横たわっている。

黒木は死体を見た。

あちこちに咬まれた傷跡や食い千切られていた。

恐ろしげな光景だ。

まるでゾンビに食われたような光景だ。

黒木は部屋から出た。

だが扉を間違えたのか、そこは研究室の様な場所だ。

瓶にあの青いチューリップがあった。

そう言えば、何で青いんだろうか？

黒木はそう思った。

「花を1つくれないか？」

「いいですが」

野村は瓶に入った花を渡した。

黒木は受け取り、こう言った。「ちょっと顕微鏡を貸してくれ」

ウィルスを観察する顕微鏡を渡された。

これしかないのか？と言いたかったが、あえて言わない。

黒木は1人になれる場所を要求した。

小さなベッドや机しかない部屋に案内された。

礼を言くと、机に顕微鏡を置き、メスで花を細かく分解した。

「まずは雌蕊からだな」

そう言って雌蕊を顕微鏡に置き、覗いた。  
わくわくした気分だ。

自然界に存在しない青い花を調べるんだ。  
だがそんな気分も吹っ飛んだ。

花に微生物が存在していた。

いや微生物ではない。

それよりも遥かに小さい。

細菌か？

いやもつと小さい。

黒木は鏡を見た。

みるみる肌が腐り落ちる。

俺は死ぬのか。

「はっ！」

目を覚ませばそこはベッドの上だ。

夢の世界と変わらない狭い個室。

だが顕微鏡こそはあるが、花は解剖されてない。

黒木は苦笑する。

とんでもない悪夢だった。

立ち上がる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6792x/>

---

感染者の創造

2011年12月19日21時49分発行